東京外国語大学『語学研究所論集』30(2), 2025 (Published 2026)
Tokyo University of Foreign Studies, *Journal of the Institute of Language Research* 30(2), 2025 (Published 2026)

特集補遺：まえがき
Special Issue: Foreword

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

DOI: https://doi.org/10.15026/0002001454

1. これまでの経緯と今回（30 号）での方針について

2009 年に『語学研究所論集』（以下『語研論集』）の 14 号で「特集」が開始され 23 号まで，10 のテーマに関する特集が行われてきた．その内容は，14 号：受動表現，15 号：アスペクト，16 号：モダリティ，17 号：ヴォイスとその周辺，18 号：所有・存在表現，19 号：他動性，20 号：連用修飾的複文，21 号：情報構造と名詞述語文，22 号：情報標示の諸要素，23 号：否定，形容詞と連体修飾複文，となっている（ただし，まだとりあげていない文法カテゴリー／文法現象も数多くある）．11 年目～17 年目（24 号～本 30 号）では引き続き，これまでの特集でデータの得られていなかった言語の補遺を進めていくことを目指した．補遺の収集もすでに 7 年目ということになる．

2. 今回データが収集された言語とその意義

2.1. 対照研究や類型的研究にとって大きな意義を持つデータ

言語に優劣はなく，どの言語も唯一無二のものであって，どの言語のどのデータも他の何物にも代えがたいものであることは言うまでもない．ただ言語類型論的研究の観点からすると，やはり極めて大きな意義を持つデータというものはある．それは何より系統的に孤立した言語のデータである．系統的に孤立した言語のデータは，極端に言えば一語族に匹敵する価値がある．こうした状況において，今回もアイヌ語とコリマ・ユカギール語のデータが 1 特集増えたことの意義は大きい．話し手がもはやほとんどいない危機言語であるだけになおさらである．

次いで，系統的に孤立した言語でなくとも，地域的にアクセスが難しい言語であったり，消滅の危機に瀕した言語で話し手があとわずかであったりすれば，その言語のデータの価値は高い．今回データを賜った言語の中で，地域的観点からみてきわめて重要なのはパプアニューギニアのドム語と南米のアヤクーチョ・ケチュア語であろう．上記の言語について，今後も他の特集データを賜ることを切に願う．

2.2. 語族内での変異や歴史，さらには語族全体の特性を解明していくために重要な意義を持つデータ

上記以外で，今号の収集言語データで多く賜ったのは，アフリカのニジェール・コンゴ語族のバントゥー諸語（12 言語：スワヒリ語，ベンダ語，ニャキュサ語，ツォンガ語，スワティ語，ツァナ語，北ソト語，南ソト語，コーサ語，ズールー語，南ンデベレ語，ニランバ語）である．アフリカに関しては，さらに西アフリカのアカン語のデータを 2 特集分，コイサン諸語のガナ語のデータをやはり 2 特集分賜った．他に，ウラル語族

本稿の著作権は著者が保持し，クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します．
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

（2 言語 : ハンガリー語，エストニア語），漢語諸方言（4 方言 : 呉語蕭山方言，閩語饒平方言，閩語雷州方言，信陽方言），チベット・ビルマ系の言語（6 言語 : ジンポー語，カム・チベット語塔公方言，カムチベット語妥壩方言，チョネ・チベット語扎古録方言，アムド・チベット語），オーストロネシア語族のフィリピンの言語（2 言語 : カパンパンガン語，ヒリガイノン語）とインドネシアの言語（1 言語 : カンベラ語），ティモール島の言語（1 言語 : テトゥン語ディリ方言）のデータを賜った．

上記の諸言語はいずれもかなり大きな語族の言語である．したがって語族全体からみれば今回までに得られたデータの量はまだまだその中でのほんのわずかであり，語族内での変異や歴史，さらには語族全体の特性を解明していく道のりはまだまだ遠い．しかし，その一方で上記のような充実した研究者たちの力により，少しずつではあっても今後も着実に蓄積が進んで行くことを十分に期待することができる．

今回のバントゥー諸語のデータは前回の受動表現に続き，アスペクトのデータを 11 言語分賜った．当然テンスの表現も関わって来るが，バントゥー諸語は現在からの距離によっていくつものテンス形式を区別することで知られている．したがって今回のデータは類型論的な研究にとってたいへん参考になるだろう．今後も他の特集データを賜ることを切に願う．

バントゥーの中でももっともよく知られたスワヒリ語のデータが全部揃ったことも大きい．本学にはアフリカ地域の学生を中心に，スワヒリ語に興味を持つ学生も多い．スワヒリ語にはバントゥー諸語研究の入り口としての重要な価値がある．

コイサンについてはすでにグイ語の全特集があり，今後，複眼的にアプローチできるようになってきたことはたいへん重要だろう．アカン語のデータを賜った西アフリカは東南アジア大陸部と共に孤立型言語の集中する地帯であり，両地域の孤立型言語を対照してみることは孤立型言語の特性の理解を進めるために意義深いことであると考える．声調言語の研究のためにも重要である．

ウラル語族に関しては，これまでフィンランド語のデータが揃っていたものの，なかなかハンガリー語のデータの収集が進まず，いわばこれも悲願であった．今回ハンガリー語の全データが揃い，さらにエストニア語についても 1 特集分のデータを賜ったことは本当に喜ばしい．ウラル語族全般に興味を持つ者たちにとっては，両言語の統一した調査票によるデータが揃っていることは，研究の大きな足掛かりとなることだろう．

漢語諸方言についても，多くのデータを集めていただいている．中国では北京官話への統一への動きが強まっていて，日本での方言研究はますます重要なものとなっている．今回賜ったデータは閩語，呉語といった南方の方言のもので，北京官話からの乖離の大きな方言である．特に閩語はその内部も閩北，閩西，閩南といった下位方言に分かれ，さらにその中にも大きな方言差があるという．記述のない方言もかなり多いと思われる．いわゆる漢語 7 大方言のデータが揃うことを期待したい．

今回もチベット・ビルマ諸語について多くのデータを賜った．前回も書いたが，惜しむらくはやはり依然としてラサのチベット語のデータが欠けていることだろう．

オーストロネシア語族はその言語数が一千を超える大語族であるが，フィリピン諸語はいわゆるフィリピン・タイプとして言語類型論においてきわめて重要な言語群である．外大に語科があることから，これまででではタガログ語（フィリピノ語）のデータが早くに揃っていたが，これをさらに別のフィリピン諸語の言語と比較対照できるようになってきたことはたいへんにありがたい．ティモール島のテトゥン語ディリ方言と，カンベラ語のデータが得られたことも，現地へのアクセスを考えると，きわめて貴重でありがたいことである．

2.3. その他の言語のデータ

今回は他にマルタ語 (10)，チャクマ語 (10)，ウクライナ語 (1)，セルビア語 (1)，ラトヴィア語 (1)，文語タミル語 (4)，カラチャイ語 (1)，民和土族語 (5)，互助土族語 (4)，モンゴル語オラド方言 (9)，のデータを賜った（( ) 内は特集の数を示す）．

言語接触にも重要な知見をもたらすものとしてマルタ語のデータが貴重であることは言うまでもない．マ

ルタ語はアフロ・アジア語族セム語派に属するアラビア語変種の一つであるが，近隣の印欧諸語の影響を大きく受けた言語である．

チャクマ語も印欧語族の言語であるが，南アジアの中でもさらにもっとも東に位置し，話者数も少ない貴重言語である．歴史的に近隣の非印欧語族の影響を大きく受けて来たものと思われる．

スラブ諸語のデータに関しては，バルカン半島中央部の言語であるセルビア語のデータが加わったことが大きい．バルト諸語もエストニア語とラトヴィア語の全部のデータが揃うことが期待される．

ドラヴィダ語族は南インドの言語の研究のみならず，日本語的な言語類型であるいわゆるアルタイ型言語の研究にとっても極めて重要な言語群である．しかし語研特集データにはこれまでわずかにブラーフイー語のデータが 1 特集分あるのみであった．その意味で今回賜った文語タミル語の 4 特集分のデータはもっとも貴重でありかつ重要なものとみるべきかもしれない．

カラチャイ語はチュルク語族の言語であり，チュルク語族の言語のデータはさらに充実したものとなって来た．民和土族語と互助土族語のデータはシロンゴル・モンゴル諸語のデータである．シロンゴル・モンゴル諸語とは甘粛省や青海省に分布するモンゴル諸語で，話者数は少ないがモンゴル語の古い特徴をいくつか保っている貴重な言語群である．今後もシロンゴル・モンゴル諸語の研究が進展することを期待したい．

モンゴル語オラド方言については，今回の 9 特集分のデータで全特集分のデータが揃った．内モンゴルのモンゴル語諸方言は多様であるが，研究が進んでいるのは主に東の諸方言であり，これに対しオラド方言はもっとも西に位置する方言である．話者も少なく，しかも減少の一途をたどっている．貴重なデータが得られたことに感謝したい．

2.4. 日本語諸方言への展開

日本語諸方言も消滅の危機に瀕した言語であり，その記録は急務である．今回は柳川市方言と北琉球奄美大島方言についてそれぞれ 3 特集と 1 特集のデータを賜った．今後もさらに南琉球語などをはじめ貴重な諸方言のデータが集積されて行くことを望む．

3. データの活用に関する報告

昨年（2025 年）11 月 22-23 日に岡山大学で行われた日本言語学会第 171 回大会において，本稿筆者の風間は「他動性の低い状態述語文の格枠組みにおける階層性について」という題でのポスター発表が採択され発表した．そこでは感情述語・感覚述語の構文を類型論的に分析・検討するため，［特集：他動性］の 6-8-b「私はバナナが好きだ」と 6-10-b「彼は犬が怖い」，および 6-14-a「彼は話をするのが上手だ」（準二重主語文），［特集：ヴォイスとその周辺］の 4-15「私は頭が痛い」（二重主語文）の調査例文に基づいた約 60 の言語のデータを使用させていただいた．

このように収集しつつある語研特集のデータも，言語間の対照や類型論的な分析・考察に活用しなければ意味がないと思う．欧米では WALS や Grambank がすでに作成され活用されている．それらに対し，またそれらと併用して，本特集データもその長所を生かしてこれを活用するとともに，その長所短所を明らかにし，場合によっては修正・追加を施していくことが必要であると考えている．

一方，ネット上でのアクセスが容易なデータベースの整備にも力を入れて，これを進めていきたいと考えている．特集データのデータベースも語研の HP で公開しているが，まだ全年度分のデータが公開できているわけでもない．英語でアクセスできるようにすることも喫緊の重要課題であると考えている．

4. 今後の目標

方言として数えられているものを含め，現時点で（最低 1 特集でも）収集された言語の総数は 142 である．前号より 16 言語増えた．今後も少しずつであっても地道にこれを増やしていくことを目標としたい．前々号

の「まえがき」では「5 年後には 300，10 年後には 600 言語を目指す」と述べたが，こうした数字はやはりそう簡単に達成できるものではなく，300 言語へもなお遠い道のりである．特に北米と（北東／北中／北西）コーカサスの諸言語，オーストラリア先住民の諸言語に関してのデータは未だに皆無である．今後も多くの個別言語の研究者の方々のご協力を賜りたい．何卒ご理解とご協力をいただければ幸いである．以上でこの「まえがき」の筆を置く．読者からの御教示，御批判御叱正等をいただければこれも幸いである．

連絡・問い合わせ先：kazamas@tufs.ac.jp, ilr419@tufs.ac.jp

謝辞

今回，データを作成・提供して下さった先生方，ならびにそのコンサルタントとなって下さった話者の方々に深くお礼申し上げたい．特に本学以外の他の機関に所属されている先生方で，本特集のデータ収集の意義に御理解を示して下さり，データを作成・提供して下さった先生方に深くお礼申し上げる．上記の「まえがき」本文に，それぞれの言語と共にそのお名前をあげてお礼を申し上げたかったが，筆者が直接に依頼した先生方と，間接的に依頼した先生方との間などで，筆者の言及の仕方の度合いが違ったり，不平等・不統一になったりすることを怖れ，あえて記すことはしなかった．ここに一括してお名前を挙げずに謝辞を記すことをお許し願いたい．